

第三章 鉱山地代

金属は他の財と同じく、労働の成果として得られる。確かに自然がそれらを生み出すが、地中深くから採掘し、私たちの用に供する形にまで加工・精錬するのは人間の労働である。

鉱山は土地と同様に、一般に所有者に地代を支払う。そして、その地代は土地の地代と同じく、それらの生産物の高い価値の原因では決してなく、その結果として生じるものである。

等しい生産性の鉱山が誰もが自由に占有できるものとして豊富に存在するなら、地代は発生しない。産出物の価値は、鉱山から金属を採掘して市場へ運ぶまでに必要な労働量だけで決まる。

鉱山の質はさまざまで、同じ労働量でも産出量は大きく異なる。操業されている鉱山のうち最劣等のものから得られる金属であっても、採掘や産物を市場に運ぶことに従事する人々が消費するすべての衣服、食料その他の必需品の費用を賄い、さらに事業を遂

行するために必要な資本を前貸しした者に通常の利潤をもたらすだけの交換価値をもっていないなければならない。地代のかからない最劣等鉱山で得られる資本収益は、他のより生産的な鉱山における地代の基準となる。この鉱山は投下資本に通常の利潤をもたらすものと仮定する。その場合、他の鉱山がこれを上回って生み出す分は、当然に所有者への地代として支払われる。この原理は土地の場合と同様で、これ以上の説明は要らない。要するに、原生産物と製造品の価値を定める一般的な規則は金属にも同様に適用される。金属の価値は、利潤率や賃金率、鉱山に支払われる地代によってではなく、金属を採掘して市場に持ち込むまでに必要な労働の総量によって決まる。

金属の価値は他の財貨と同様に一定ではなく変動する。採鉱に用いる用具や機械の改良や採鉱技術の進歩によって必要な労働が大きく減ったり、同じ労働でより多くの金属を得られる高生産性の新鉱山が見つかったり、市場への持ち込みや輸送の便が向上したりすることがある。こうした場合には価値が下落し、他の財貨と交換できる量は減る。反対に、より深部での操業が必要になったり、坑内に水がたまるなどの事情で金属の入手が難しくなれば、価値は他の財貨に比べて大きく上昇し得る。

したがって、たとえ一国の貨幣が法定の基準に厳密に合致していても、金貨や銀貨の

価値は他の財と同様に、偶発的で一時的な変動だけでなく、自然要因による持続的な変動にもさらされると正当に指摘されている。

アメリカ大陸の発見と、そこに豊富にある良質な鉱山の発見は、金銀などの貴金属の自然価格に非常に大きな影響を及ぼした。この影響はなお終わっていないと考える人も多いが、アメリカ大陸の発見に起因する金属の価値への影響は、すでに久しく終わっている可能性が高い。したがって、仮に近年その価値の下落がみられるとすれば、その主因は鉱山の操業方法の改良に求められる。

原因が何であれ、その影響は極めて緩やかで段階的であり、金銀を他のあらゆる財の価値を評価するための一般的な媒介手段として用いるうえでの実務上の不都合や支障はほとんど生じなかった。金銀も価値の尺度としては変動し得るにせよ、金銀ほど変動の少ない財はほとんどない。この点と、硬さ、延性、可分性といった性質など、これらの金属が備える他の利点とが正当に評価され、多くの文明国で貨幣の標準として金銀が広く選ばれてきた。

金銀貨は価値尺度として不完全さを免れない。その理由は、状況によってこれらの金属の産出に要する労働量が多くなったり少なくなったりするからである。この点を踏ま

えつつ、本章ではこれらの不完全さがすべて取り除かれ、地代のかからない鉾山からは、同一量の労働でいつでも同一量の金が得られると仮定する。その場合、金は不変の価値尺度となる。量は確かに需要に応じて増えるが、その価値は変わらず、他の財の価値変動を測る基準として極めて有効である。私は本書の前半でも金がこの均一性を備えているものとして扱っており、次章でもこの仮定を続ける。したがって、価格の変動を論じる際には、その変化は常に商品の側にあり、それを測る媒介である貨幣の側にはないのみなす。